

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 2

朴 希沙 (Kisa Paku)

前回は、「してもの会」の「泥水すする木」の物語を紹介しながら、私や「してもの会」のメンバーがマイクロ・アグレッションという新しい差別の概念に出会った経緯を紹介させていただきました。今回は、前回のふりかえりをした後、マイクロ・アグレッションのイントロダクションを試みたいと思います。

・はじめに ～前回のふりかえり～

前回ご紹介したように、在日コリアンのためのサポートグループ「それが一人のためだとしても（以下、してもの会）」では、主に在日コリアン（以下、在日）参加者の悩みをシェアしたり、「べてるの家」の当事者研究の方法を用いてそれぞれの困りごとについて「研究」したりしていました。

その中で在日の悩みは、①個人的な事情

や欲望と②日本社会や日本人との間に生じている葛藤というふたつの背景が、複雑に絡み合って生じていることが分かってきました。そこで生まれたメタファーのひとつが、「泥水すする木」です（興味のある方は前号を参照してください）。

在日の個人的な事情や欲望と、日本社会や日本人との間に生じている葛藤とが、どのように複雑に絡み合いながら在日の悩みを惹起し、グループ活動の中で統合されていったのか——そのプロセス自体興味深いものでしたが、それはまた次号以降に、タイミングを見て書きたいと思います（日本質的心理学会『質的心理学研究』18号に投稿した「『してもの会』における **Respectful Racial Dialogue** の実践」でもそのプロセスを詳しく記述していますので、興味のある方はそちらも参照してもらえればと思います）。

今回注目したいのは、在日が抱えている

日本人や日本社会との葛藤が徐々に明らかになるにつれて、グループ内でも多くの話し合いや交流が生まれたことです。在日のメンバーが、今までは黙っていた日本社会に対する違和感や辛かった体験を口にし始めると、日本人参加者の間には動揺が走りました。「してもの会」に参加していた日本人は、基本的に在日といい関係を結びたいと考えている人たちでしたが、時にその日本人とのやりとりの中でも、葛藤や対立が水面下で生じること分かってきたからです。「自分も、在日にとっては“岩”（在日のつながりを阻むもの）のひとつなのかもしれない」。この認識をめぐって、してもの会では様々な対立・そして交流が展開されていきます（これを、「分断から動き出す交流」と名づけています）。

・なぜマイクロ・アグレッションに着目したのか

ここで明らかになったことは、属性や立場の違いが、些細なやりとりや交流に影響をもたらすということでした。「してもの会」で取り上げられる悩みは一見大したことのない、日常的なものです。ところがそこに、日本人との葛藤や対立が織り交じっているのです。

日本人と在日が一緒に在日の悩みをシェアするということは、その葛藤や対立もシェアするということでした。それは、パーソナリティだけでなく立場や属性の違いがやりとりに与える微妙な影響に、自覚的になっていくプロセスだったともいえます。そして「してもの会」ではそのあいまいな

対立や葛藤をむしろ積極的にとりあげて、「交流にいかす」種にしていました（そのキーに、当事者研究という営みがあります。当事者研究の考え方をうまく取り入れることで、「加害」「被害」を個人に還元することなく、「場の課題」「交流の源」にいかすことができるのです。これについてもまた次号以降で^^）。

マイクロ・アグレッションは、あからさまで露骨な旧来型の差別とは特徴が異なります。それは、とても日常的で、無意識的で、些細な攻撃として、多くの場合やりとりの中で伝えられます。マイクロ・アグレッションの研究者である Sue も、「“人種差別はよくないよね”と言っている良識的な人も、時にマイクロ・アグレッションをしてしまう”ことを指摘しています。本人は全く悪気がなく、むしろよかれと思って言っていることでも、相手を傷つけている場合があるわけです。在日個々人の悩みを起点に、そういった些細な日常のやりとりに注目する中で、私たちは次第にマイクロ・アグレッションという概念につながっていきました。

・マイクロ・アグレッション：イントロダクション①

さて、ここでマイクロ・アグレッションがどんなものかを感じていただくために、ある事例を紹介したいと思います。これは、現在「マイクロ・アグレッション翻訳会」で翻訳出版活動に取り組んでいる、Sue 著『Microaggressions in Everyday Life : Race, Gender, and Sexual Orientation』に

載っていたものです。

一事例①：カトリーヌのケース

この事例では、カトリーヌという成人女性が登場します。彼女は、ある会社の就職面接を受けに行っていました。事例自体は面接に向かう電車の中から始まっているのですが、今回は就職の面接場面のみを取り上げて紹介したいと思います。

…カトリーヌを面接している間、面接官たちはとてもくれた様子で、リラックスしているようだった。しかしその間、カトリーヌはあることに気づいていた。面接官が男性社員のことは「〇〇さん」と苗字で呼んでいるのに対し、女性社員のことは「〇〇ちゃん」と下の名前と呼んでいることを。面接官は、何度かカトリーヌのことを「キャシー」と愛称で呼んだ。カトリーヌは、面接官に「カトリーヌと呼んでください」と言おうかと思ったが、雇い主になるかもしれない人と仲違いしたくはなかった。彼女は、絶対にその面接に受かって職に就きたいと思っていたからだ。

面接中、カトリーヌがその役職の採用基準について尋ねた時、面接官はこんなジョークを言った。

「君は一体、なんでそんなに働きたいんだい？君ならいつでもイケ男を見つけられるのに」

カトリーヌが笑わず真剣な顔でいると、面接官は急いでこう付け足した。

「私は、最もふさわしい人物がこの職に採用されるべきだと思っているよ。私たちはすべての男性と女性を平等に扱っている。事実、私は社員が男性であるか女性である

かなんて、考えたことすらない。人間はただ人間であり、誰でも平等に雇用され成功する機会を持っているのさ」

カトリーヌはその返答をととても不快に感じた。そして、自分は採用されないであろうことを悟りながら、面接会場を後にした。

『*Microaggressions in Everyday Life : Race, Gender, and Sexual Orientation*』 第1章より

上記の短い事例について、みなさんほどのようなことを感じられたでしょうか。「人間は男であろうが女であろうが、誰でも平等に雇用され成功する機会を持っている」と言ったこの面接官との面接の後、なぜカトリーヌは「自分は採用されないだろう」と結論付けたのでしょうか。

この結論に対して、「極端すぎる」と感じる人もいるかもしれません。しかし大切なことは、なぜカトリーヌがそのように強く確信したかを考えることだと、Sue は言います。

男性のことは「〇〇さん」と呼び、女性のことは「〇〇ちゃん」と呼ぶ面接官が発言した「最もふさわしい人が採用されるべき」という言葉は、カトリーヌにどのように響いたのでしょうか。

マイクロ・アグレッションという用語は、Chester Pierce によって、1970年代に初めて使われました。Pierce は論文の中で、日常的にアメリカの黒人に向けられる、形容しづらい、しばしば無意識的に行われる中傷や侮辱を言い表そうとしました(Pierce, Carew, Pierce-Gonzalez, & Willis, 1978)。

現在は、①明示的に相手の社会的に弱い立場としての属性を用いてこきおろす

Microassault (マイクロ・アサルト)、②相手の社会的・文化的アイデンティティを無礼に扱う Microinsult (マイクロ・インサルト)、③社会的に弱い立場の人々の経験や感情などを否認し無価値なものとして扱う Microinvalidation (マイクロ・インバリデーション) の3種類に分類されています。

これからまた回を追って紹介していこうと思いますが、マイクロ・アグレッションは社会の中で軽んじられたグループに属する人々が、恒常的に、そして継続的に経験していることです。どんなマイクロ・アグレッションも、1度だけなら影響は小さいでしょうが、生涯にわたって継続的に経験することによって影響が蓄積し、有害な結果が生じることがあります。

例えば面接官との短い一連のやりとりは、カトリーンの仕事を見つけないという要求はつまらないもので、面接官はカトリーンを将来有望な人として真剣には見ていないことを伝えています。しかし面接官には、その自覚はないかもしれません。またカトリーンも、自分が不快に感じたわけを言葉にしづらいかもしれません。そしてもしこれで不採用になった後、面接での出来事を

誰かに話したら「気にしすぎだよ」「何をそんなに怒ってるの？」などと言われるかもしれません（これが、相手の社会的経験やその時の感情を否定するマイクロ・インバリデーションです）。こういった一連の出来事全体が、カトリーンを動揺させ、混乱や葛藤を引き起こすでしょう。

以上、今回は簡単にマイクロ・アグレッションのイントロダクションをさせていただきました。次回は、マイクロ・アグレッションについてさらに詳しく述べ、日本の現状についても触れたいと思います。

・・・続く

【参考文献】

- Pierce, C., Carew, J., Pierce-Gonzalez, D., & Willis, D. (1978). An experiment in racism: TV commercials. In C. Pierce (Ed.), *Television and education* (pp. 62–88). Beverly Hills, CA: Sage.
- Sue, D.W. (2010). *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*. Hoboken, N.J.: John Wiley & Sons.